

される。羨道部は比較的小型の石材を積み上げるが、そのために大きく東へ押されたのであろう。本来の幅は確認できない。

三号墳

墳 丘 石室入口の両側で大きく土取りがなされている。石室最前部の石材が埋もれて詳細を確認できないが、北西の墳裾から石室最前面の規模を測ると約一九^ノとなる。これも排水溝北西側に最大幅五^ノほどの周溝の痕跡が見える。

主体部 三室構造となる横穴式石室であり、一・二号墳と主軸が異なる。長さ一二・三^ノまで確認できるが、なお左右に石材が埋没している。玄室は長さ三^ノ、幅二・六^ノ、高さ二・九^ノほどの規模となるが、これも床面は埋没している。腰石に使用する石材は最も大きく、奥壁のそれは高さが二・八^ノを超え、両側壁もほぼ一枚石で幅二・六^ノ、高さ二・四^ノ以上の巨大なものである。また、ここでは奥壁と左右両側壁の腰石の高さが揃えられている。中室は長さ約二^ノ、幅二^ノ、高さ二・二^ノを測る。腰石は左右ともに一枚で、その上に二段を積みむ点では一号墳に似る。前室は長さ約二・二^ノ、幅は乱れるが二^ノ前後、高さは三室の中で最も低く約二^ノとなる。石材も玄室、中室、前室の順に小型化している。

以上の三基は、石材の大きさや積み方に注目すれば二号墳↓一号墳↓三号墳の順に築造されたことが推測される。三号墳は同じ理由から橘塚古墳と綾塚古墳の間に位置付けられようか。

九 上田出土仿製四獣鏡

昭和三十二〜三十三年（一九五七〜五八）ごろ、大字上田大分八幡神社付近で古門誠一ほかがブドウ畑造成に際して発見したもので、直径四^ノ、高さ〇・七^ノほどの円墳から粘土とともに出土したと伝えるが、現在は位置を確認できない。

直径一〇・一^ノ、鈕の部分の厚さ〇・九^ノを測る完形鏡である。無文の斜縁、二条の鋸歯文帯、櫛歯文帯、そして内区に走獸四頭を浮き彫りにする。鈕孔はちょうど走獸の頭部に開けられていて、円座乳・文様の配置は正確である。走獸は長胴で、首が後ろ向きに長く立ち上がり、くちばしも含めて鳥首状となる。四体ともほぼ同じ図案となる。

文様はとも明瞭に鑄出されていて、配置も整然とする、優品といってもよいものである。遺存状態も良好。

古墳時代前期後半に属するもので



写真2-25 上田出土仿製鏡
(個人蔵)

あろう。

一〇 緊急発掘調査された古墳

野添遺跡

県道大久保犀川線道路改良工事によって平成八・九年度に発見・調査されたものである。町南部の鉄甲帽山から派生する小支丘上に位置し、最高所の標高は五五^尺を測る。四基の古墳などが調査された。

一号墳

墳 丘 南半分が破壊されていたが、直径あるいは一辺長八^尺の円(方)墳に復元できる。盛土は〇・五^尺ほどに過ぎない。

主体部 中央部に厚さ二〇^釐ほどの扁平な石材を長辺に左右五個並べ、頭位の小口には板石を立て据え、足位の小口には木板を立てたような痕跡があった。このままの高さでは遺体を埋葬できないことから、半円形に近い木蓋で覆ったものである。特殊な木棺であったと思われる。周溝から畿内系の直口壺が出土したが、主体部内は無遺物である。

二号墳

墳 丘 一号墳の南西、三号墳の裾にある。周溝は西側をコ字形に巡るが、その内側長は六^尺に過ぎない。一号墳の尾根線上に位置する南側は幅五^尺ほどの幅広いものとなり、ここから土器や砥石が出土した。主体部はコ字形周溝の中央付

近に箱式石棺が配置され、その足位(南側)に斜交して石蓋土壙墓が置かれていた。盛土はほとんど確認できない。

主体部 箱式石棺は長さ一・八^尺、幅〇・二^尺・〇・四^尺、高さ〇・二^尺の規模をもち、頭部には粘土を用いた枕が設置されていた。石蓋土壙墓は素掘りの穴(土壙墓)を石で覆ったもので、長さ一・二^尺、幅〇・三^尺弱、高さ〇・一^尺ほどの規模である。両者ともに内部に副葬遺物はなかった。

三号墳

墳 丘 最高所に位置し、この古墳群の盟主墳である。部分的な調査であるが、一辺長一二^尺ほどの方形に近い形状となるようで、傾斜の急な斜面の一部を除いて幅二・五^尺の周溝を巡らせる。盛土は〇・五^尺ほどである。主体部は木棺と箱式石棺各一基で、周溝内でも箱式石棺一基が発見された。また墳丘裾付近から土師器壺が出土している。

主体部 木棺は中央部に置かれ、長さ二・八^尺、幅〇・八^尺、高さ〇・四^尺の箱形と推測され、粘土で目張りされていたようである。棺内の足下付近から鉈が出土している。箱式石棺はやや脇にあって、木棺とは主軸がずれている。長さ二^尺、幅〇・四^尺、高さ〇・三^尺の規模で、やはり頭部に粘土で造った枕が置かれていて、その脇に鉄斧があった。棺内から歯と大腿骨が出土し、三十代の男性かと推測されている。

四号墳